泡沫の夢を紡ぐ家

泡沫の夢
すぐに儚く消えてしまったり
壊れてしまったりする夢

0 1．背景

1995 年一激震が神戸を襲った。多くの若い命が奪われたと同時に、彼らの夢も一瞬にして泡と消えた。

震災から 28 年が経とうとする今、そこには私たちと何ら変わりのない幸せな日常があったことを知った。
彼らの存在は思っていたより身近で、わが身のように寄り添い、想いを継ぐことに一抹ながらも祈りを見出した。

「生きている人たちが、彼らの想いや目標を繋いでいってほしい」
「命がある限り、目いっぱい使って生きてほしい」

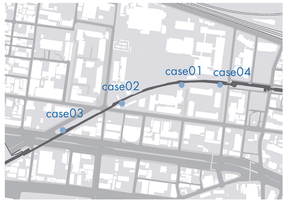
遺族の言葉は、夢ある青年たちが私たちに遺したメッセージのように聞こえた。

もし生きていたら―。

ここは、故人の想いが空間となって浮かび上がった住宅。住まうことで彼らと対話し、今という時間をともに歩む。
泡沫のように繊細で、だからこそ尊く美しい彼らの夢は、住人の日常によってささやかに未来へと受け継がれていく。

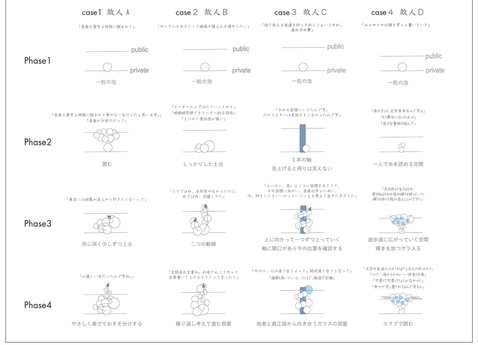
0 2．敷地

神戸のとある臨港路地遊歩道沿いに、4 つの敷地を設定した。震災記念公園へと導くこの遊歩道は、パブリックアートが街の風景を彩るミュージアムロードと交差している。それに伴い、外部から訪れる人々も多く見受けられる。また、春には桜並木が住民が日常的に行き交うにもなっている。



0 4．ダイアグラム－住居のでき方

故人について語られる冒頭によって、一般の泡からそれぞれの空間が立ち上がる。


case1 故人 A
「音楽と歌で表現の限界まで。」
case2 故人 B
「サーフィンをスタイルで映画を撮る人を目指したい。」
case3 故人 C
「『自分自身』を見る中にもう一人の『自分』がいて、温かさを感じ。」
case4 故人 D
「みんなが幸せ家族を撮ってほしい。」
Phase1
public
private
一般の泡
Phase2
「音楽と歌で表現の限界まで。」
「音楽の力はすごい。」
「サーフィンをプロのプレーとみると、
「映画撮影はリモートの協力体制と、
「さいかち集団の集い」
「それを言葉にしてくれんで。
パッとよりそいの気持ちをしっかりんで。」
「あれさん、お空を見るんで。」
「ひ子の一生のはなし
「きりと雪の物語。」
閉じ
しっかりした土台
1 本の軸
見上げると開口は見えない
一人で水を飲める空間
Phase3
「東京にいる間に来ようと行きたいなーって。」
「ミトてはね、自然系やるからのびど、
ずっとれい、温暖？だな。」
「ちょっと、あっちょっと、温度を見てきて。
そ年度間にあいて、温度計まとめて。
ホ、何をしたらいいかっていうと年度と年度をたどりたい。」
「ちょっと、あっちょっと、温度を見てきて。
そ年度間にあいて、温度計まとめて。
ホ、何をしたらいいかっていうと年度と年度をたどりたい。」
「ほのぼのするなにか。
豊かなはかの生活の時を始めたい。
時代時代の知かるはしんぴ？」
用心深く少しずつ上る
二つの地棚
上に向かってワーッがつよっていく
軸に開口がある今の位置を確認する
迷宮道に広がっていく空間
障子を張りガラス玉
Phase4
「心豊ーいきがこんんで？ずゃ。」
「自信自分で言葉ん。お母さんと二年ッ？
自言葉ーて？どりどりどりーて言ってりりり。」
「やはりー、心の通ぐ言ってんん。時代通ぐ言ってる言ってる。
「通信通ーかーいーっ！ひ！通信？通信？通信。」
「自分で言ってんんんーー。
「自分で言ってんんんーー。
「自分で言ってんんんーー。
「ずっとーーー